

## まちを潤す水～ダム必要性を問う

ダムは私たちの生活の水循環を円滑にし、生命を守る必要不可欠なものです。一方で、莫大な建設費が掛かることや、環境破壊に繋がることで非難を浴びます。

20世紀、ダムの必要性が問われ始めました。

前長野県知事である田中康夫さんは、長野県知事時代の2001年12月20日「脱ダム宣言」をしました。ダムの必要性を徹底的に調査、審議し、「長野県にコンクリートダムは造らない」と議会で宣言後、ダム事業を強制的中止に追い込みました。政府から降りてくる公共事業費に頼りきりの体質を改善しようという試みでした。この宣言は日本国内に計り切れない影響を及ぼしたのです。

2006年7月梅雨前線による記録的な集中豪雨が長野県中部地域を中心に襲いました。諏訪湖・天竜川流域で死者が出る大災害です。「治水整備の遅れが招いたのではないか」という批判が出され、脱ダム宣言を支持していた層にも田中施策の批判が拡大しました。被害が甚大であった長野県岡谷市付近は脱ダム宣言によって中止したダム事業はなく、災害を免れたことから、「脱・脱ダム宣言」によって方針を転換しました。このようにダムの必要性を問う政策も大きく揺れ動いています。

九州の川辺川ダム(熊本県人吉市)も脱ダム宣言に影響され、建設反対運動を盛り上がらせました。川辺川は日本一の清流といわれていたためダム建設による環境破壊を懸念し、反対する住民運動が強かったのです。ダムはムダだといわれています。

人吉市長の田中信孝さんは今年9月2日、「計画を白紙撤回すべきだ」と表明しました。市長は「ダムの治水効果に疑問を持つ人が多い。想定以上の降雨にダムが対応できないなら、住民の生命・財産を守れない。ダムが水質汚濁や環境悪化の一因になりかねず、球磨川下りやアユに影響する。」と、ダム事業について批判しました。「市民の意見を聴く会」でも80%を超える市民がダムに否定的な意見を述べました。熊本県の蒲島郁夫知事も川辺川ダム計画の反対を表明しました。

これに対し、水没予定地を抱える同県五木村の和田拓也村長らは川辺川ダムの早期完成と村民の生活再建を改めて表明しました。

ダム計画が発表されたのは1966年です。当時、五木村は村民をあげてダムに反対しました。しかし、そのうち容認派と反対派に分かれ、激しく対立しました。結局、村民は国や県の説得などで切り崩されていったのです。

水没予定地の谷底に住んでいた家のほとんどの人は立ち退きに応じ、7割は村を去りました。6000人いた村民はいま1400人に減り、谷底には草ぼうぼうの空き地がただ広がっているだけです。なぜ五木村の人々は住み慣れた家を引っ越さなければならなかったのでしょうか。住み慣れた家、助け合い親しくしてきた近所の仲間たち。仕方なくその場を離れたのにそれが意味をもたなかったとなれば私は怒りを感じると思います。ダム建設中止は、到底受け入れられないでしょう。

1965年7月の水害では球磨川があふれ、2人が死亡、1025戸が浸水しました。流域で生活する人々の不安は計りきれません。治水整備の必要性が高まります。

治水が必要だという思いは皆同じです。しかし、ダム事業が必要だということに関しては賛否両論であります。蒲島郁夫熊本県知事は、ダムによらない治水対策を求めています。しかし、ダムに頼らない治水が本当に大丈夫であるかは示せていません。

今年の8月、各地域でゲリラ豪雨が頻繁に発生しました。死者も出ています。地球温暖化による異常気象により、私たちの暮らしの不安は高まっています。水に対する恐怖が広がりを見せています。一方で、市民の多くが、ダムに否定的である以上、ダムによる治水対策がどの程度有効に機能するかを示さなければなりません。

現在、根本的な治水対策はダム以外では困難であります。ダムによる治水が一番だと私は思います。大雨のとき、流域近くに住む人々はどんなに怖いことか。建設費は莫大ですが、お金で命が守れるならば安いと思います。後で、造っておけばよかったでは遅いです。早急に住民の不安を解消すべきだ

と思います。

これまでの四十二年間、川辺川ダムをめぐる住民同士が賛成反対に回り、対立してきたことで、水害より、互いの不信感が人々の心の中に渦巻き、人と人とのかかわりが希薄になっています。この地域被害を改善していくことも課題です。

川辺川は国が「日本一の清流」と認めています。球磨川は「日本三大急流」の一つに数えられ、川下りやラフティングに年間約6万人が訪れ、人吉市にとって最大の観光資源です。この環境破壊が懸念されダム事業を反対する人が多いです。果たして、ダムが造られることで環境は破壊されるだけなのでしょうか。

福岡県の大野城市にある牛頸ダムは、住居に近い場所にあります。自然に親しめるレクリエーション空間を創っていて、キャンプ場、水辺公園、中央公園、スポーツ公園などから構成されています。福岡市近郊の方々のいこいの場所として、多くの方々が牛頸を訪れます。私が訪れた日も多くの方が散歩やジョギングなどで利用していました。また、昭和60年にホタル部会が結成され、研究と飼育・保護活動によって今では牛頸ダム下流で5月中旬から6月上旬までホタルを見ることができます。ホタルは、綺麗な水が流れる自然のある川にしか住めません。つまり、人々の努力によって、環境が保たれているのです。

ダム計画決定には長い年月がかかります。公共事業は計画算定当時と経済社会状況が変わり必要性が低下している例は少なくありません。しかし大規模事業は基本的には当初計画に基づき続けられています。

川辺川ダムは、現状からすると、中止に追い込まれるかもしれません。しかし、本当に中止していいのでしょうか。違う方法で十分な治水対策ができるのでしょうか。流域住民の安全は確保されるのでしょうか。住み慣れた土地を失った五木村の人々は納得するのでしょうか。

ダムは確かに、莫大な建設費が掛かります。環境破壊にも繋がります。しかし、生命を救うのです。これがどんなに重要なことでしょうか。生命を救えなければ、環境も守れないのではないのでしょうか。これから先、ダムの適切な必要性を、市民に広めなければならぬと思います。